

山行報告書

京都田辺山友会

報告者園上 雅晴

山名	南アルプス 北岳・間ノ岳	山行名	例会 夏山集中登山			
ルート	一日目広河原—大樺沢二俣—白根御池小屋分岐—北岳肩ノ小屋—北岳山頂—北岳山荘 泊 二日目北岳山荘—間ノ岳—三峰岳—野呂川越—両俣小屋—野呂川出合					
山行日	平成27年7月26日～28日	天候	一日目晴れ、二日目朝雨、昼から晴れ			
参加者	リーダー：園上 男性：津田、坪田、藤村、守口、若林、広瀬、 合計：10名	サブリーダー：小川 女性：倉光、秋山				
ルート概略図 広河原—大樺沢出合—二俣—右股コース—北岳肩ノ小屋—北岳山頂—北岳山荘—中白根山—間ノ岳—三峰岳—野呂川越—両俣小屋—林道野呂川—野呂川出合—（北沢橋）—北沢峠—戸台口	コースタイム					
	地名		時：分	地名	時：分	
	広河原山荘	着		北岳頂上	着	13:00
		発	5:02		発	13:30
	大樺沢二俣	着	7:28	北岳山荘	着	14:52
		発	7:40		発	4:35
	白根御池 小屋分岐	着	9:52	間ノ岳	着	7:00
		発	9:52		発	7:07
小太郎尾根 分岐	着	10:26	両俣小屋	着	12:17	
	発	11:00		発	12:40	
肩ノ小屋	着	11:37	野呂川出合	着	14:53	
	発	12:00		発		
<p>登山一日目は絶好の快晴、全員南アルプスの絶景を楽しみながらの登山開始、広河原山荘から登り始める樹林帯の中、寒い位であったが小尾根をのぼると暑くなる、大樺沢二俣分岐までは所々岩場があるがきつい難所は無くひたすら樹林帯の中を高度を上げてゆく、樹林帯を抜けると河原（大樺沢）は直射日光の日差しがきつく、木陰が欲しくなる、徐々に高度を上げ、二俣へ、ここから右股コースへ2時間ほど急登が続き、木の根っこや岩越え等難儀するが白根御池小屋との分岐に着く。ここから更に急登、小太郎尾根までは暑さも加わり早く稜線に着かないかとそればかり考えての登りを登り切り小太郎尾根との分岐点で昼食、稜線から小さなコブを何回か越えて、肩ノ小屋に着く南アルプスの大パノラマを満喫する、ここから礫を踏んで更に急登して北岳頂上にやっと着く、全員喜び合い集合写真を撮る、頂上は岩場にありそんなに広くないが人に溢れていた、ここから岩場下りとなり、慎重に山荘を目指す、下りではあるが岩場が多くザレ場下りを1時間程で北岳山荘に到着。</p> <p>二日目の朝は雨の中の行動開始、全員カッパ着用、間ノ岳へ、間ノ岳への道は雨の中での行動で在り難儀しました、中白根山頂上は解らぬまま過ぎ途中で窪みを見つけて朝食を摂る、幸いこのころから雨がやみ雨の中での朝食とはならなかった、北岳山荘を出てから2時間半ほどで間ノ岳頂上に着く、北岳に比べ人気がないのか人も少なく、標識も何となく寂しい頂上、直ぐにガレ場を下るがここはなかなか降り応えのある岩下り、雨が降った跡でもあり慎重に下る、この区間は設定時間以上の行動となった、三峰岳までは息が抜けない下り、低灌木（ハイ松）は雨に濡れておりズボンがぐしょぐしょに、暫くして樹林帯の中に入りザレ場も無くなりホットする、野呂川越までは柔らかな落ち葉のうえを歩く気持ちの良い山歩き、全員（これは良い道や）と絶賛、両俣小屋に着くと名物小母さんの出迎え、冷たい水を頂き休憩、熊が出たとの林道を暫く歩くと治山用の林道にそこからはひたすら緩やかな下りの林道（結構広い道）を2時間10分歩き、野呂川出合に着く、バスの時間まで20分全員ぐったりとしかし完登した喜びを噛み締めて道端に座り込む。バスは時間通りに来て（貸切であった）広河原に向かいました。</p> <p>ヒヤリハット 注意散漫による、転倒が何回かありましたが全員怪我もなく無事に下山、岩場は緊張するので何事も無く過ごしますが、平坦な所とか細い道では話しあったりしていたり、他の事に気を取られて転倒したりすることがあり、山道では注意散漫が怖い。</p>						

登山経験の浅い私には、この南アルプスの縦走は大変貴重な体験になった。
10名の仲間とまとまって行動し、360度の大パノラマを満喫し、自分の
体力と気力を発揮しての夏山登山でした。CL・SLと仲間に感謝の山行でした。

夏山登山（北岳から間ノ岳）感想文

若林 憲治

仕事の関係で年に二度程長野県飯田市に行く機会あり、南アルプスを眺めながら何時か
機会があれば登りたい山が北岳で有った。

幸い希望が叶い個人的にも今回の夏山登山企画に感謝している。北岳登山 天気にも
恵まれて道中富士山も拝顔（中々観るチャンスは無いよ 知人談）する事もできた。
連日長時間の工程にも関わらず、参加者全員無難？に工程消化され、改めて今回参加
メンバーのパワーに奮起させられた次第。

今回の南アルプス登山時に山友会以外からパワーを頂いた出来事を記述。
北岳の頂上にて休憩中 『福岡弁』 でお話されている方にご挨拶 78歳の女性でした。

（北岳山荘も偶然同じ部屋で会話も弾む）

白峰三山を縦走中との事 75歳から登山を始めたそうで、当初の目的は富士山登山であつた。三度
の挑戦で富士山お鉢巡りも出来目的達成も 富士山より眺めた北岳が黄金の山に見えて次なる目標
が出来た。鳳凰三山(7月初旬達成)と今回の白峰三山縦走であつた。

（何れも山梨県のガイド同行）通常より1日長い工程も今は福岡県に無事帰福された事でしょう。次
なる目標を掲げておられ80歳（傘寿）の記念登山と称して、ガイド無しお一人で再度富士山登山計
画されるとの事でした。80歳になりこんな心境になれたら良いのにね～ また また 沢山の
パワーを頂いた今回の夏山登山でした。

行程表通り消化でき CL, SLには感謝 ご参加の皆様本当にお疲れ様でした。

夏山集中登山 北岳・間ノ岳コース 感想文

守口 実

今年も夏山のシーズンがやって来た。今年はどうしようか？説明会当初の計画「甲斐駒ヶ岳・仙丈
ヶ岳」は数年前に登った。「北岳～間ノ岳～農鳥岳」は10年位前に逆コースだが「塩見岳～間ノ岳
～北岳」と歩いた。農鳥岳には行ってみたい。最近例会への参加が少なくなった。体力に不足はない
か？ 説明会の前半は所用があり途中から参加した。会議室にはあまり会員がいない。参加の何人か
から「最後のチャンスになりますよ。」と言われ、結局北岳のコースで参加する事にした。最近2, 3
年の夏山は天候に恵まれない。真夜中の満天の星空を見、寒いくらいの朝夕の空気にも触れ、晴天で
尾根筋をゆっくりと展望を楽しみながら歩き、夕日に輝く峰々と夕空、朝日に輝く山並み、赤く輝く
空と雲、雲海に御来光。色とりどりに咲き誇る高山植物、こんな景色を見てみたい。

山行の第一日目。林道を走る路線バス車窓からの景色。北アルプス、中央アルプスそして南アルプ
ス仙丈ヶ岳に甲斐駒ヶ岳がよく見える。道端には高山の花、高山の蝶と期待通り。第二日目快晴。初
めは樹林帯の中、ペースが速い。もう少しゆっくりと余裕をもって歩きたい。稜線まではひたすら登
る。付近の花々は綺麗に咲いている。花の北岳と言われるだけの事はある。稜線に登ると甲斐駒ヶ岳
仙丈ヶ岳はもちろん鳳凰三山八ヶ岳富士山の頂部までも見える。大パノラマを満喫する。第三日目は

雨の中の活動開始。前日小屋での天気予報では午前中は何とかOK。昼からそれも少し遅い時間になると雨か？で御来光もひょっとしての希望であったが、完全に期待外れ。小雨の中、間ノ岳を通過し三峰岳迄は以前来たはずだが全然記憶にない。その後野呂川越付近は気持ちの良い山歩き。そこから両股小屋へは倒木をかき分けの急な下り、又小屋から出会いまでは長い林道歩き。何とか時間内に下山口に到着。同行の皆さんのおかげで完登できた。感謝、感謝・・・

甲斐駒・仙丈組 9 人を入れた夏山集中登山参加メンバー19 人中で最年長。何時ものメンバーA、B・・・Y、Z さんたち今年是不参加、寂しい感じ。百名山の深田久弥氏が言う「山には登る山と遊ぶ山とがある」と。今回は日本一の山を見ながら第二、三の高峰（最近の資料では穂高岳と間ノ岳の標高は同じ 3,190m）を登る山行だった。山には色々の楽しみがある。

老いた私の“夏山”—— 北岳、間ノ岳登山

倉光 展子

我が山友会に“夏山”“秋山”と短く呼称する山の祭典がある。普段の例会よりも多くの会員が参加するので、疎遠になっていた人にも会え、みんなで楽しく山行する。“秋山”は市民一般向けで（もちろん山友会の会員も多く参加する）、登山に興味を持つきっかけになると同時に、山友会への登竜門になっている行事である。私たち夫婦が 16 年前、山友会入会を考えるきっかけになったのは、“秋山”の白山登山であった。“夏山”は会員向けで、できるだけ多くの会員が参加できるように、いろいろな趣向が凝らされ、強く印象に残る山行が多かった。しかし最近では普段から沢山の山行が計画され、大きな山行に出かける機会が多くなった。そのためかこれらの大きな行事は下火になっている。それでも古い私の頭には、「さあ“夏山”だ。どこに行こう」と浮き足立つものがいつもある。

*前哨戦

今年は南アルプスの甲斐駒岳、仙丈岳のコースと、北岳、間ノ岳コースの二つが役員会から提示された。仙丈岳、甲斐駒は 2003 年の“夏山”で行ったので、北岳、間ノ岳にした。仙丈から威風堂々たる北岳を見て、いつか行きたい山と思ってきた。迷いなく選んだものの、最初の打ち合わせ会に行って、人数の少なさに驚いた。北岳、間ノ岳は 10 人で、そのうち年齢が私より上は一人の男性のみ。女性は私を入れて二人。その彼女は言わば“スポーツおたく”に近い人。こんな人たちと一緒にいけるかな、それに正直最近登山回数が大幅に減っている。迷った挙句、とにかくこれから行われる訓練登山のすべてに参加して、自分の力を試してみよう、その上ではっきり決めよう、一夜漬けの学生気分と自己批判しながら、次の行動に委ねることにした。しかし訓練登山はちょうど梅雨期で、雨のために中止が続いた。結局行ったのは、鎌が岳と愛宕だけ。しかし鎌が岳では、足も体も思いの外軽く動いた。「よし、やろう。その代わりに、今回はあくまでも人の足引っ張りにならないように歩くことに集中しよう。山の景観や花は二の次、自然との対話ではなく、“老体”との対話で行こう、“文科系”でなく“体育系”で行こうじゃないか」とひとり息巻いた。しかし、よく考えてみると、本当に私をプッシュしてくれたものは「来年、はたして行けるかどうかわからんぜ」という誰かの一言であった。

こんな私にさらに難題が降りかかってきた。10 人の役割分担表を見ると、私は何と会計係。これだけは避けたい、と思っていた係りだ。個人の小金も管理できないものが、みんなの大金を預かるなんて。それに痴呆もじわじわと忍び込んでいるし・・・やるしかない、とあきらめかけた時、ことは好転した。我が山友会にも「捨てる神あれば、拾う神あり」。役割を決めたリーダーを捨てる神とは思ってないが、拾う神は確かにあった。会計係の私を助けるというよりは、主になってやってくれる人があった。

*本番 I 日目（7 月 27 日） 広河原山荘（1529m）→大樺沢二俣（2209m）→小太郎尾根→肩の小屋（3010m）→北岳（3193m）→北岳山荘（2902m）

いよいよ登山開始。今日は高度差 1600m 以上を登ることになる。広河原山荘を 5 時に出発する。荷物は極力少なくと思っていたがいつもより重い。これは気のたるみかと思っただ、今回は

日本で 2 番目に高い山、3000m 級だから、遭難のことも考え、余分な衣服、食料も必要だろうと案じる気持ちが、少しずつ荷物を増やしていった。

私より年上の M さんは、さすが経験の貫録、体力の衰えばかりを気にして、遠慮がちな私と違って「速いばかりが能やない。周りをしっかり見て、楽しみな、何のために山に来たのかかわからへん」と重鎮らしい発言をして、(より)若い者のはやる気持ちを抑えられる。天気は快晴、私は快調。大樺沢二俣に 7 時半に着いた。うつむき加減でひたすら歩いてきた私の前に、パーと明るく広い世界が広がった。鮮やかな緑、数か所に残っている雪溪の白、シナノキンバイの黄色、空の青を背景に、北岳は雄々しく王者の風格でそびえたつ。

頂上に向かう大岩壁がロッククライミングで有名なバットレスか。帰宅後、自宅のテレビで、バットレスでの滑落死を知った。私もいろいろな失敗をして、その失敗を通していろいろ学んだが、この失敗は即、死につながるのだ。自分だけでなく、ロープで繋がっている相手を巻添えにしてしまう。山は、自然は厳しいものだ。人間なんてちっぽけなものだと思知らされる。

大樺沢二俣を出発する。さあ、これからは急登になる。目指す北岳の挨拶という最高の動機づけをもらって、身も心もチャージされた。北岳は高山植物の宝庫と言われているが、花の盛りは残念ながら終わり、今は花はちらほら。以前北岳に登った友人がキタダケソウを見たことを誇らしげに語っていた。今回だってその気になればあるのだろうが、今回の山行は“体育系”に徹すると決めている。

小太郎尾根に上がると雄大な山岳展望がひろがる。やはり一番目立つのは花崗岩の白く輝く甲斐駒が岳、日本のマッターホルンみたいだ。そして仙丈岳。12 年前たくさんの花が咲いていて歓喜した仙丈、小仙丈、懐かしく親密感を感じる。富士山もちょっと頭を覗かせた。ハイマツの稜線上に座って昼食となった。青天の下、私たちは暑い暑いと文句を言って、顔をガードし、広河原山荘でもらったおにぎりを「まずい、まずい」と言って食べた。「罰当たりめ！ 娑婆の雑念を神聖なところに持ち込むな！ 心の貧しいものは救われぬ！」空耳でなくて、天からの声が聞こえてきた。

肩の小屋で休んで、北アルプスの大パノラマをひとしきり楽しんだ後、いよいよ北岳に挑む。しかし北岳までの道は遠かった。やっと着くと、そこは歓声が飛び交っていた。きっとオリンピックの表彰台の 2 番目に上がったような感激なのだろう。3193m と大きな文字が書かれた標識の後ろから顔だけ出して、証拠写真を撮ってもらった。やはり高い。富士山のように上部の面積が広くないので、余計高く感じた。その後、そんなに疲れてもいなかったのに、私は何故か周りをよく見もしないで、みんなから離れて、ボーと座っていた。自分の立ち位置も確かめなくて、もったいないことをした。

次は今夜の山小屋、北岳山荘に向かう。結構急な岩、礫の下りで緊張する。290m 下ると赤い屋根の独特な形の小屋が見えた。無事着いた感激もそこそこに、受付に直行して、寝るところを確保しなくてはならない。支払いは“拾う神”に任せて、私はみんなにいろいろな情報、注意を伝えなければならない。

山小屋の私たちの部屋に、少し遅れて、九州からの八十何歳の女性と彼女の男性ガイドが入ってきた。みんなの質問に答える形で、彼女の話が始まった。ツアー登山で富士山に 2 回挑戦したが、途中で断念して、3 回目親切な個人ガイドを見つけて登頂できた。そして今日北岳完登、次の目標は奥穂とか。流れるような九州弁のお話は、まるで漫談のように私たちを引きつけた。自分をお笑いの種にしなげら、みんなを笑わず語りの面白さの底流には女性としての、老人としての反骨精神があるように思えた。山の話、人生の話はまだまだ続いていたが、私は次の雑務に移らざるをえなかった。大部屋には私が女の子と間違えた男子の高校生 20 人ほどと先生一人の団体もいて、もちろん我が山友会の男性もいて、こんな雑魚寝もいいものだった。

本番 2 日目 (7 月 28 日) 北岳山荘 (2902m) → 間ノ岳 (3189m) → 三峰岳 (2999m) → 野呂川超 → 両俣小屋 → 野呂川出会

4 時 35 分、小雨の中、雨具を付けての出発。昨晚は夕焼けを見逃したし、今朝はご来光を望めない。北岳のご来光は素晴らしいと聞いていたので、少し残念と思ったが、今回は“体育系”に重点を置いていたので、それほどがっかりせず、淡々と出発した。間ノ岳には 7 時に着いたが、ガスっていて、ピークを実感することもできず、標識に触れてお別れ。人も少なく、“4 番目”

とはこんなものかと競技の選手の気持ちを思いやった。標高第2位の北岳とはたった4mの差なのだ。相棒がしきりに“まのたけ” “まのたけ” と誤読している。音が良くないので直してもらった。しかしどうして“あいだの山”なのだ、何と何の間なのだ、と思った。帰ってきて調べたら、やはり北岳と農鳥岳の間という意味だそうだ。

更に間ノ岳がかわいそうになった。こんなことはどうでもいいことか。

次は向きを西に変えて、三峰山を目指す。短い距離ながらガレ場、岩場、急坂でみんな緊張を強いられる。三峰岳は天気が良くなかったのと、先を急ぐ身だったので（仙流荘で別グループと合流して一緒に帰路につくことになっている）、通過点でしかなかったが、天気がよければ、眺望はいいはずだ、と思った。この山はなんと2999m、微妙な数字である。3000m級の山々が連なる南アルプスには入れてもらえない寂しい山なのだ、と勝手に同情する。これもどうでもいいか。

ここから方向を変えて、仙丈岳と塩見岳を結ぶ仙塩尾根に入る。ハイマツ帯の間の細い道は、フカフカして、足に優しい。「こんな道好きやなあ」と誰かが言う。広く敷き詰められたハイマツのじゅうたんは雨に濡れて色鮮やか。さっきの道が険しかっただけにみんな癒されていた。しかしこんな所こそ魔の道、誰かが狭い道を滑りはずした。幸い大事に至らなかったが、人でも山道でも魅力的なものは、えてして足元を見せないものだ。人の往来は少なく、標識も少なく、淡々と道を歩いていると、間違っていないか一抹の不安が漂う。「野呂川越はまだか」「間違っているのと違うか」「確かめようや」と声が上がる。そこは我が山友会の若衆、誰かが地図を見て等高線で位置を確認し、誰かが磁石で方向を確認し、誰かが高度計を見る。これらを総合判断して「正しい！」と下す。何度かこんな確認があつて、感心しているうちに、やっと野呂川越の小さい標識に行きついた。

ここから方向を東に変えて山の終点、両俣小屋をめざす。下りだし、もう着いたも同然と思っただが、そうは問屋が卸さないのが“山の道”。雨でぬかるんだ道、濡れた根っこだらけの道には本当に難儀した。ただ、雨に濡れたシラビソの赤ちゃんがかわいくて、慰めになった。両俣小屋の広い、明るい、黄緑色の林に着いた時天国に来たかと思ったほどだ。

礼儀がなく、時間がない私たちはどやどやと遠慮なく、両俣小屋の庭のテーブルに陣取るや、お弁当を開いた。それを柔らかい笑顔で受け入れてくださったのが、天国の番人ならず両俣小屋の女主人だ。その上、冷たいおいしい水があるよ、と小屋の後ろの水飲み場を教えてくださいました。街の常識ではこんな時何かを買って、お金を落とすものだ、と水場で冷やしてあるカルピスを買おうとすれば、「この水は厳しい日照りの道に転がしていても絶対に腐らない水なのよ。おいしいよ。あんた水を2本も汲んでいるじゃないの。カルピスなんかいらぬわよ。」ときた。トイレも借りたが、とても行き届いた清潔なトイレで、どこにもお金を入れるところはなかった。この女主人は只者じゃないな、と思いながら、お礼を言って別れた。

ここからは野呂川出合まで林道歩き。3時15分のバスに乗るので、9kの道のりを2時間30分以内で歩かなければならない。緊張の糸も完全にゆるんで、疲れている身にはこれはきつかった。ちょっと上りになると、とたんにペースが落ちた。地図には治山工事用林道と書いてあった。確かに道の両側のあちこちで堰堤の工事がされていた。山の地すべり跡も見かけた。私たちは街に住んでいて、たまにのんきに山登りに来ているが、山国日本のあちこちでは、こんな自然との闘いは常時あるのだと改めて認識した。

*両俣小屋の女主人

両俣小屋の女主人はやっぱり只者ではなかった。帰ってきて、中央図書館で南アルプスの本をパラパラとめくっていた時、見覚えのある女性の顔が目についた。よく見ると両俣小屋の女主人だった。記事を読んでいるうちに驚いた。1982年8月数十年に一度という猛烈な台風が南アルプスを直撃した。鉄砲水で野呂川は荒れ狂い、両俣を襲った。テントを張っていた人たちも小屋に逃げてきたが、水が小屋の二階までついたとき、小屋崩壊は時間の問題、脱出しかないと判断した女主人は脱出行を試みた。テント組は先に、後の小屋組25人は女主人（星さん）に率いられて、出発した。私たちが通った両俣から野呂川越までの急坂を登って、そこから私たちとは反対の道、仙丈に向かって、強い雨がたたきつける仙塩尾根を、北沢峠の長衛荘まで決死行をやった。まさにドラマである。無事全員が長衛荘にたどり着けた。星さんの強いリードと励ましで、

みんなが団結して頑張り、命を失わずに済んだ。星さんはその後すっかり崩壊した両俣の小屋、広場、登山道を、一人で復活させたということだ。

2006年7月、我が山友会の佐々木英夫さん率いる14名（私も含む）は雲ノ平を目指した。ところが、梅雨末期の大雨が続いた。薬師沢と黒部川の合流点にある薬師沢小屋で、増水して荒れる川音の恐怖を皮切りに、踏み外せば、黒部ダムに直行して“黒部ダムの藻屑”になってしまうという細い橋を渡る恐怖、さらに、猛烈な風雨にたたきつけられて祖父岳から撤退した恐怖・・・自然の脅威を突き付けられた5泊6日の山行を思い起こすと、今でも身震いしてしまう。それだけに星さんが書いた「41人の嵐」の記録が身につまされた。

*終わって

南アルプス百名山10座のうち、私はこれで9座登ったことになる。甲斐駒が岳、仙丈岳、鳳凰三山、荒川三山、赤石岳、聖岳、光岳 それに今回の北岳、間ノ岳。百名山踏破を目指しているわけではないが、山に魅かれ、チャンスに恵まれ、友に恵まれた結果がこうなったので、自分でも驚き、感謝している。

今一つのことを終えて、私は満足している。満足と感謝の気持ちでいっぱいだ。“老体”もまだまだ捨てたものじゃないとあつかましく思えるようになった。甘いかな？！

しかし白峰三山は私の後ろ髪を引く。これらの山の空気に包まれ、心をあずけられるような時間がほしかった。可憐に、たくましく咲いている花々と、しなやかに命をつないで、生を謳歌している木々と対話したかった。・・・白峰三山はそれらをみんな満たしてくれる山だと確信する。私は本当に欲張りだなあ！

北岳山行の感想文

広瀬 秀憲

日本第2、第3の山に挑戦。当日が近づくに従い興奮が高まってきた。

広河原山荘を薄明かりの中を出発。樹林帯を抜け沢を数回渡礁して谷が広がってきた。大樺沢二俣である。

ここから右俣コースの急登になる。次第に見通しがよくなり、鳳凰三山がよく見えた。ジグザグの急登を登りきると、小太郎尾根に到着。目前に雄大な仙丈岳、その後ろに甲斐駒がのぞいている。連なる尾根に暫く見とれる。しかし急登の途中から熱中症なのか、高山病なのか、足が重く体がだるい。休憩しても楽にならない。

日本第2の北岳頂上についても盛り上がらなかった。

山荘で隣り合わせになった豪快なおばさんは、80歳を前に富士山を手始めに山登りを開始。今回ガイドを雇い、白峰三山を縦走。九州おなごのおおらかで、頑固さを感じた。

翌朝は雨、第3の間ノ岳は人気がないのか、登山客もまばら。記念写真を撮り早々に三峰岳へ。このコースはあまり登山客が使わないらしい。ガレ場の急坂であったが、楽しいコースであった12時すぎようやく両俣小屋に。名物の女将にあう。おいしい山水をすすめられ、商売抜きの女性であった。

野呂川出合に予約のバス時間に間に合った。

初日こそ体調不良でどうなるかと思ったが、終わってみると、あまり登山客が通らないコースであったらしいが、面白いコースであったと満足しています。また素晴らしいメンバーと一緒にできたことに感謝しています。

※ 鷲峰山訓練登山感想文の投稿がありましたので掲載いたします。個人山行のため山行報告はありません。

鷲峰山訓練登山一口感想文

2015/8/8 上田昌宏

訓練登山 (鹿島槍五竜縦走の為)

八月八日(土曜)鷲峰山,行者道巡り山行実施された、天候快晴気温 27 度前後、風力微風メンバー 8 人 9 時 40 分出発、地方道南東に向けて行動開始、沿線の田んぼ稲穂付き,トンボ飛び交う田園地帯のどかな風景である

一時間位で金胎寺境内に着く、ここから登山道細くなる、行者道と言われる険しい崖道に入る、他のハイカーとは合わない

アタックザックでないと通過出来ない所多い、聞こえるのは鳥の声沢の音だ、蝉の鳴き声よく響く、岩棚は赤ペンキ表示してあり左右間違えると行き詰まる、険しく慎重に大胆に登攀下降繰り返す。

滝の落下口近くに三平米の広場ありそこで昼食となる。滝を見ながらお握りを頬ばる心地よい風が時どき通過するこの気持ちは此処にいる人しかわからないだろう。

後半も頑張るぞ。エイエイオー

